独立行政法人 国立病院機構
呉医療センター・中国がんセンター

Vol.27
2026
November
令和8年11月



波と風

理　念

**思いやりのある
やさしい誠実な医療を
提供します**

基本方針

1. わかりやすい説明による安心・安全な医療を提供します
2. 最新の知識と技術による質の高い医療を提供します
3. 地域医療機関との連携を強化し、地域社会の発展に貢献します
4. 高度な専門性をもつ医療人の育成に努めます
5. 医療資源を適正に活用し、健全な経営を実践します

CONTENTS

2〜4P　就任挨拶
5P　診療科紹介（皮膚科）
6〜7P　職場紹介（臨床検査科）
8〜9P　職場紹介（企画課医事）
10〜11P　令和8年熊本地震におけるDMAT活動（病院支援について）
12P　令和8年熊本地震対応について（医療班）
13P　4階病棟編成
14〜15P　「第7回地域医療連携のつどい」を終えて
16P　令和8年度職員研修（コーチング研修）
17P　解剖慰霊祭について
18P　「やっぱり看護師になりたい!!」〜ふれあい看護体験記〜
19P　令和8年度 第2回オープンスクールを開催しました
20P　第15回 臨床研究セミナーを開催して
21P　認定看護師紹介
22P　うちの部署の接遇キラリさん
23P　連携医療機関紹介（石泌尿器科医院）
24P　我が家のスターたち、寄付について、編集後記



就任挨拶

周産期医療センター部長　　熊谷　正俊

９月１日より周産期医療センター部長を拝命いたしました産婦人科の熊谷です。分娩数の減少、産婦人科勤務医の不足、働き方改革などの課題に対応すべく、数年前から広島県が主導して県内の周産期母子医療センターの集約化・重点化の計画が進められておりましたが、遂に今年の４月から呉圏域に２施設あった地域周産期母子医療センターが当院１施設に集約化されました。中国労災病院が地域周産期母子医療センターの指定を解除され、呉圏域のリスクの高い出産はすべて当院で引き受けております。リスクのある妊産婦を受ける一方、呉圏域の分娩数自体は減少を続けており、産科のある４A 病棟の病床運営が非効率なものになっておりましたので、４階(4A・4B)病棟の整備と再編が行われ、９月から 4B 病棟が産婦人科のホームになり、このタイミングでの周産期医療センター部長就任であります。産科では分娩数減少に抗って当院での分娩を少しでも増やしたいと思い、分娩時の満足度を高めるための取り組みを行っております。まず昨年２月から当院分娩の約 30％を占める帝王切開において術後早期回復プロトコル ERAC（Enhanced Recovery After Cesarean）を導入し、次いで今年７月から経腟分娩において希望の多い無痛分娩を呉圏域で初めて導入いたしました。現在は経産婦を対象としておりますが、なるべく早く初産婦にも対象拡大する予定です。呉圏域唯一の地域周産期母子医療センターとしてハイリスク妊産婦の管理だけではなく、妊産婦のあらゆるニーズにも応えられる分娩施設であるべく尽力する所存でございますので、どうぞよろしくお願いいたします。



就任挨拶

がんセンター・がん診療部長　　尾上　隆司

このたび、呉医療センターのがんセンター・がん診療部長を拝命した、尾上隆司と申します。

当院は地域がん診療連携拠点病院として、質の高いがん医療を提供するとともに、地域の医療機関の皆様と連携し、患者さんが安心して治療を受けられる体制づくりに取り組んでまいりました。私はこれまで消化器外科医として、肝胆膵領域のがん診療を中心に、外科治療や臨床研究に携わってまいりました。その経験を通じ、がん診療は「がんを治す」ことだけで完結するものではなく、患者さんが治療を受けながら、その人らしい生活を続けていくことを支える医療であると感じています。

近年、がん医療は手術や薬物療法、放射線治療の進歩に加え、がんゲノム医療（がんの遺伝子の変化を調べ、治療選択に役立てる医療）などにより、患者さん一人ひとりにあわせた治療選択が可能となりつつあります。当院の使命は、こうした最新の治療法を、地域の患者さんにお届けすることです。

一方で、治療に伴う外見の変化に対応するアピアランスケア、思春期・若年成人(AYA 世代)の患者さんへの支援、就労や療養生活に関する相談など、医療だけでは解決できない課題への対応も重要になっています。当院では多職種が協力し、相談支援体制の充実にも努めてまいります。

また、市民公開講座などを通じて、地域の皆様にがんの予防や早期発見、最新の治療について正しい情報をお届けすることも大切な役割と考えています。

地域の先生方との情報共有をさらに進め、診断から治療、療養生活に至るまで、切れ目のないがん医療を提供できるよう、顔の見える連携を大切にしてまいります。

今後ともご指導、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



就任挨拶

医療情報部長　　髙木　慎太郎

このたび、医療情報部部長を拝命いたしました消化器内科の髙木です。私は、昨年４月より当院にお世話になっておりますが、赴任当初、それまでとは違った環境に大いにとまどいました。その中で最も苦しんだのは「電子カルテの違い」でした。年齢のせいもあってか、異なるシステム操作にかなり戸惑いましたが、スタッフの皆さん、特に医療情報部の皆さんには大いに助けていただき診療を軌道にのせることができました。また、昨年末に実施した電子カルテのバージョンアップでも、大きなトラブルなくスムーズに移行できたのは、医療情報部の皆様の事前の入念な準備や現場での柔軟なご対応のおかげだと感謝いたしております。

さて、現在、医療界は大きな変革期を迎えています。国が推進する医療 DX への対応や、働き方改革に伴う業務効率化、職員の情報リテラシー向上の啓発、病院を標的としたサイバー攻撃など問題点も多々あり医療情報システムが担う役割は大きくなっています。これらの問題に対してはより一層取り組んでいく必要があると考えています。病院の医療情報部の使命は、システムを安定稼働させることですが、それ以上に、デジタル技術を活用して現場の業務負担を減らし、「患者さんと向き合う時間」を少しでも多く生み出すことではないかと考えます。日常業務で感じる「使いにくさ」や疑問に寄り添い、誰もがストレスなく使える環境づくりを心がけていきたいと思いますので、どんな些細なことでもぜひお気軽にお声がけください。今後ともよろしくお願い申し上げます。



就任挨拶

小児医療センター部長　　世羅　康彦

この度，令和８年９月１日より小児医療センター部長に就任いたしました小児科の世羅です．新しく創設された「小児医療センター」の初代部長を拝命し，大変光栄であると同時に，その任に身の引き締まる思いです。

この小児医療センターの話をいただいてから，この少子化で小児患者が減少してく時代に，どのような役割を果たせばよいのか考えてきましたが，まだ明確な答えが出ていません．ただ，少子化であるからこそ，子どもたちの健康を願う家族の思いは，ますます大きくなっているはずで，これに応えることが病院，そして小児医療センターの役割ではないかと考えています．小児に関わる診療科は小児科だけではありません．実は当院が標榜するほとんどの診療科に小児が受診しています．産婦人科は子どもたちが生まれる前から，そして外科，脳神経外科，整形外科，形成外科，眼科，耳鼻咽喉科，皮膚科，泌尿器科，精神科，放射線科，救急救命センターで子どもたちが診療を受けています．そして，内科の各診療科にも成人にキャリーオーバーした小児患者が受診することもあります．このような各診療科での小児の診療が円滑に行えるよう，何をすべきか，何をしなければならないのか，そして何をしないのか，その役割を考えながら精一杯，努めていく所存です．これからも，小児の診療にご理解とご支援を賜りますよう，よろしくお願い申し上げます。



就任挨拶

医療技術研修センター部長　　髙橋　俊介

このたび、医療技術研修センター部長を拝命いたしました、髙橋俊介です。

これまで腎臓内科科長ならびに透析室長を務めてまいりましたが、いずれも初代の役職でありました。既存の役職に任じられるのは今回が初めてであり、改めて身の引き締まる思いでございます。医療技術研修センターは、病院敷地の最も南西に位置しております。この建物は昭和 57 年に国立呉病院附属リハビリテーション学院として開設され、平成 13 年に国立病院呉医療センター附属リハビリテーション学院と改称された後も、多くの理学療法士を育成してまいりました。平成 20 年 3 月 31 日をもって惜しまれつつ閉校となりましたが、私が当院に着任したのはちょうどその直後の平成 20 年 4 月のことです。当時は佐治文隆院長のもと、学院跡地の利活用が議題となっておりました。その後、平成 22 年に上池渉院長のもと「呉医療技術研修センター」としてリニューアルオープンし、現在では各種研修やハンズオンセミナーの会場として活用されております。

今後は、こうした歴史ある施設の価値をさらに高め、職員の皆様が実践的な技術を学び、研鑽を積む場としてより一層活用していただけるよう努めてまいります。腎臓内科・透析医療の立場からも、多職種連携を推進し、当院の医療の質向上と人材育成に貢献できるよう、微力を尽くしてまいる所存です。皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。







瀬川医療技術研修センター専属スタッフ

診療科紹介

皮膚科

皮膚がん 悪性黒色腫について

皮膚科科長　石川　哲三



皮膚がんは一般的に高齢の方に発症しやすい疾患です。基底細胞癌など比較的に転移しにくい癌もありますが、有棘細胞癌、悪性黒色腫などの皮膚がんは放置すれば転移してしまうため早期発見・早期治療が重要になります。

本日は皮膚がんの中でも悪性度が高くリンパ節や他の臓器に転移しやすい悪性黒色腫（メラノーマ）についてお話しをさせていただきます。

悪性黒色腫は皮膚の色素をつくるメラノサイト（色素細胞）がん化して生じる皮膚がんです。一般には「ほくろのがん」と呼ばれています。全身の様々な部位の皮膚にできますが、稀に粘膜や目にも発生することがあります。日本では 1 年間に人口 10 万人あたり 1 ～ 1.5 人が新たに発症すると言われています。基底細胞癌や有棘細胞癌は 70 歳代後半の患者が多いのに対し、悪性黒色腫の患者の平均年齢は 60 歳代前半と他の皮膚がんと比べ若い傾向があります。日本人では足の裏、手足の爪の下など末端の部位にできる「末端黒子型悪性黒色腫」が多いことが知られています。見えにくい場所にできるため、普段から足の裏や爪も含めて皮膚の変化を確認することが重要です。

悪性黒色腫は褐色から黒色のしみ、ほくろ、盛り上がりとして現れることが多く次のような変化が受診の目安になります。

・左右で形が異なる
・輪郭が不規則で、にじんだりギザギザしたりしている
・黒、茶、灰色など、色にむらがある
・直径が6mm 以上、または徐々に大きくなっている
・色、形、硬さ、表面の状態が変化している
・出血、かさぶた、痛み、かゆみ、潰瘍がある
・爪にできた黒い線が太くなる、色が濃くなる、爪の周囲の皮膚まで色が広がる

これらの特徴があっても全てが悪性黒色腫とは限りません。「以前からあるほくろだから」「痛くないから」と自己判断はせずに気になる場所、気になる変化があれば早めの病院受診をお願いします。

診察では、まず視診を行い、必要に応じてダーモスコピーという拡大鏡を用いて病変を詳しく観察します。

悪性が疑われる場合には組織の一部または全体を採取し顕微鏡で調べる病理検査を行い確定診断につなげます。

病気の進行の程度を確認するため、画像検査や必要に応じてリンパ節の検査を行います。

治療の基本は、病変を周囲の皮膚を含めて切除する手術です。早期であれば局所麻酔による日帰り手術で対応できる場合もあります。切除範囲や入院の必要性（全身麻酔による手術）は病変の大きさ、深さ、発生部位などによって異なります。病状が進んで手術が難しかったり、遠隔転移がある場合でも近年は治療の選択肢が広がり、手術に加えて、免疫チェックポイント阻害薬や分子標的薬などの薬物療法を行います。

私たちの免疫には過剰な反応によって正常な組織を傷つけないよう免疫細胞の働きにブレーキをかける仕組みがあります。がん細胞はこの仕組みを利用して免疫からの攻撃を逃れて増大します。免疫チェックポイント阻害薬はこのブレーキを解除することで免疫細胞がメラノーマの腫瘍細胞に対する攻撃力を高めます。これらの薬の登場により以前と比べ治療成績は向上しています。しかし、免疫の働きが強くなりすぎることで正常な臓器にも炎症が起こる「免疫関連副作用（irAE）」が生じることがあります。皮膚の発疹・かゆみ、下痢、だるさ、発熱、息苦しさ、咳、甲状腺機能の異常、肝機能障害などが代表的な症状です。治療中は定期的な診察や血液検査を行い、気になる症状が現れた際には自己判断で様子を見ず、速やかに担当医や医療機関へ連絡することが大切です。

最後に繰り返しになりますが、悪性黒色腫は、早期に発見し治療を開始することが予後を改善する上で非常に重要になります。気になるところがある場合は自己判断せずに早めに皮膚科受診をお願いします。



職場紹介

臨床検査科

輸血検査室　臨床検査技師　下岡　　愛



＊輸血とは

輸血は病気やけが、手術などにより不足した血液の成分を補う治療です。血液製剤には「赤血球製剤」、「血漿製剤」、「血小板製剤」などがあり、患者さんの状態に応じて必要な成分を補充します。輸血を安全に実施するためには、適切な血液製剤の選択と、検査・管理が必要であり、輸血管理室はその重要な役割を担っています。



赤血球製剤



血漿製剤



血小板製剤

＊検査体制

輸血管理室では自動輸血検査装置 2 台を用いて、血液型検査や、不規則抗体検査などを実施しています。

また、必要に応じて試験管法（用手法）による検査も実施しています。自動検査装置による結果とあわせて確認することで正確な検査結果の提供に努めています。

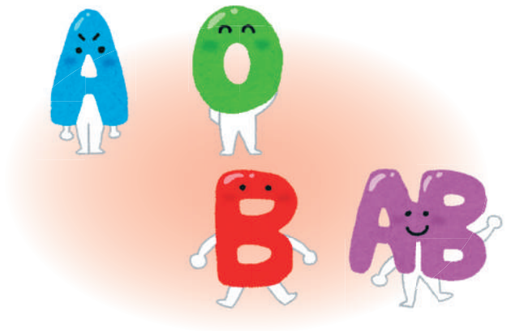


ORTHO　VISION　Swift
オーソ・クリニカル・ダイアグノスティックス株式会社

＊血液型検査

血液型検査は安全な輸血を行うための基本となる検査です。輸血管理室では ABO 血液型と Rh 血液型を確認し、患者さんに適した血液製剤を選択しています。

ABO 血液型は、日本人では A 型が約 40％、O 型が約 30％、B 型が約 20％、AB 型が約 10％の割合といわれています。



また、ABO 血液型と同様に重要な血液型である Rh 血液型では、日本人の RhD 陰性の割合は約 0.5％と少なく、適切な血液製剤の確保が重要となります。

血液型の確認は安全な輸血の第一歩です。輸血管理室では患者さんの検体で血液型を確認するとともに、過去の検査結果とも照合しながら正確な判定を行っています。

＊不規則抗体検査

ABO 血液型や Rh 血液型以外にも、赤血球にはさまざまな血液型があります。過去の輸血や妊娠などをきっかけに、これらの血液型に対する抗体（不規則抗体）が作られることがあり、輸血時の副作用の原因となる場合があります。そのため、不規則抗体の有無を確認し、検出された場合にはその種類を特定します。

＊交差適合試験

輸血前の最終確認として行うのが「交差適合試験」です。この検査は赤血球製剤を輸血する際に実施するもので、患者さんの血液と輸血に使用する赤血球製剤を試験管内で混ぜ合わせ、適合性に問題がないことを確認します。

＊血液製剤管理

血液製剤は患者さんの治療に直結するため、適切な保管と品質管理が欠かせません。赤血球製剤、血漿製剤、血小板製剤にはそれぞれ適した保管温度が定められており、温度管理や有効期限の確認を行いながら保管しています。

また、院内で必要な血液製剤を迅速に供給できるように在庫管理を行い、救急医療や緊急手術にも対応しています。



血小板保存システム



血液製剤保冷庫

輸血管理室では献血によって支えられている貴重な血液を必要とする患者さんに届けられるよう、日々業務に取り組んでいます。これからも正確かつ迅速な検査と血液製剤の品質管理を心がけ、安全な輸血医療に取り組んでいきます。



職場紹介

企画課医事

専門職　松本　　興



企画課医事部門は、患者さんが安心して診療を受けられるよう、さまざまな事務業務を担当しています。来院された患者さんを最初にお迎えする受付では、診察券の発行や保険資格の確認、診療科へのご案内などを行っています。患者さんにとって病院の第一印象となる場所でもあるため、分かりやすく丁寧な対応を心掛けています。

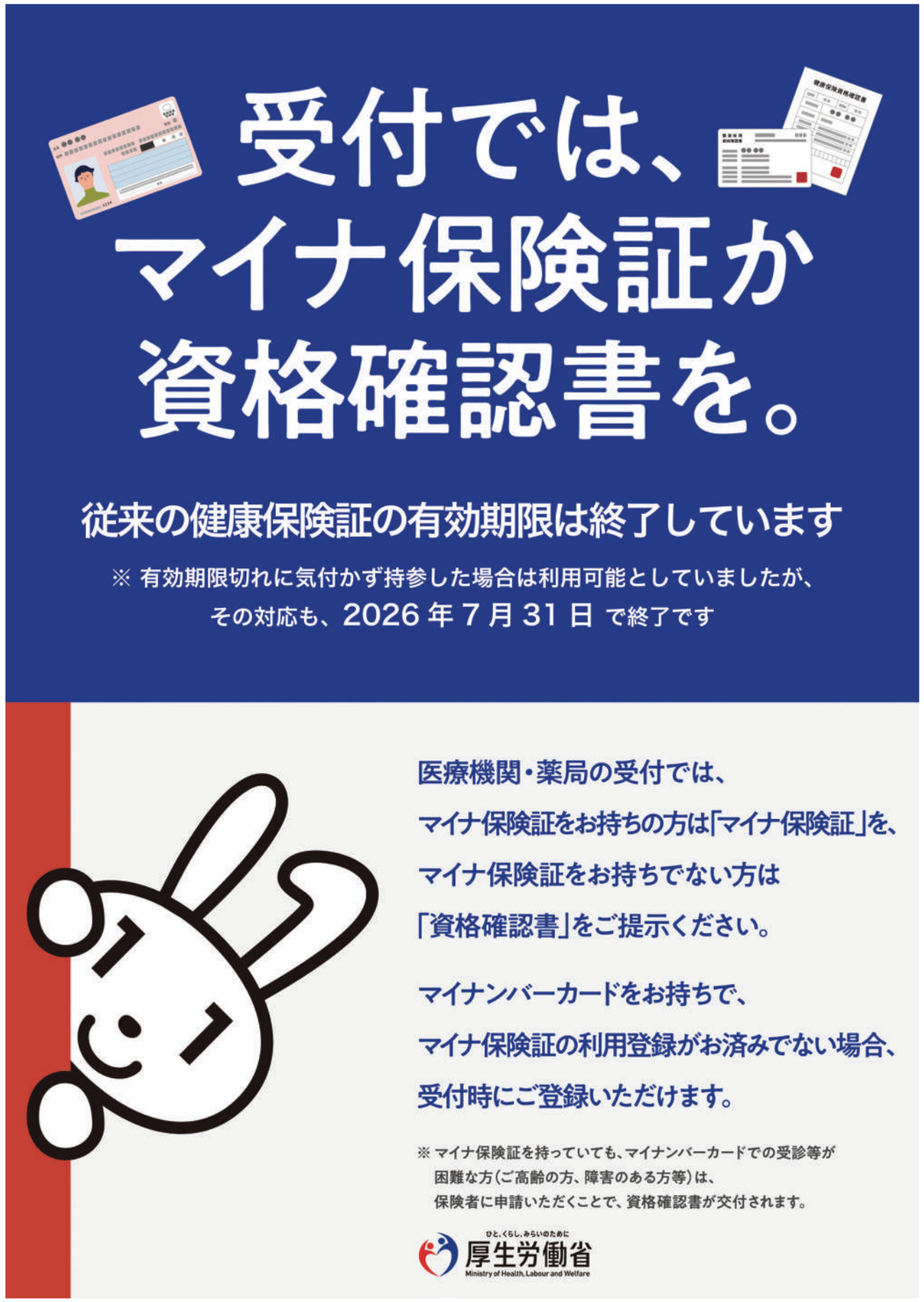
診療後には、医師や看護師が記録した診療内容をもとに、診療費の計算を行います。診療費は国が定めた診療報酬制度に基づいて計算するため、制度の改定内容を正しく理解し、正確かつ迅速に処理することが求められます。また、患者さんから寄せられる医療費や各種制度に関するご質問にも対応しています。

受付方法も大きく変化しています。従来の健康保険証は有効期限が終了し、現在は使用できなくなりました。受診の際は、健康保険証として利用登録をしたマイナンバーカードである「マイナ保険証」または「資格確認書」をご提示いただきます。医事部門では、患者さんが戸惑うことなく受付できるよう、分かりやすい説明とご案内に努めています。

さらに、病院が適切な医療を提供するために必要な「施設基準」の届出や管理も、医事部門の重要な業務です。職員の配置状況や医療提供体制などを確認し、関係部署と連携しながら書類を作成します。表からは見えにくい業務ですが、病院の運営や医療の質を支える大切な役割を担っています。

医事部門は、患者さんと医療スタッフ、そして病院運営をつなぐ部署です。これからも正確さと丁寧さを大切にし、患者さんに安心して受診していただける環境づくりに取り組んでまいります。





令和8年熊本地震におけるDMAT活動（病院支援について）

救急科　診療看護師　竹田　明希子



7月28日16時27分に熊本県でマグニチュード7.1の地震が発生しました。今回DMATの2次隊として広島県からは10チームが派遣となり、呉医療センターからも1隊（医師1名、看護師2名、調整員2名の計5名）の派遣が決定しました。

DMAT（Disaster Medical Assistance Team）とは、災害発生直後の急性期（概ね48時間以内）から活動が開始できる機動性を持った、専門的な研修・訓練を受けた災害派遣医療チームです。出発前日に必要資機材や個人装備を整え、宿泊場所など2泊分のみ事前に確保し、7月30日の午前9時30分に当院を出発し、済生会熊本病院に設置されたDMAT活動拠点本部（参集拠点）に向かいました。

活動拠点本部からの指示を受け、翌日7月31日から宇木総合病院の病院支援を行いました。（写真①）具体的な活動内容は診療支援と、DMATの撤収が可能かどうかの検討を行うことでした。（写真②）



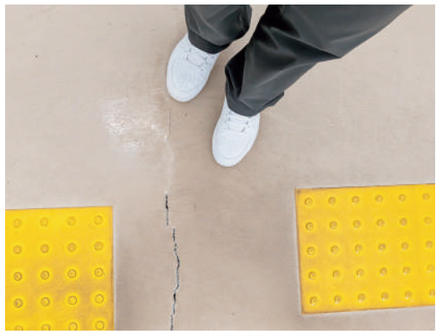
【写真①　7/30の出動前】



【写真②　活動拠点本部の様子】

私達が病院支援に入ったのは発災3日目であり、電気が復旧した中での活動でした。活動初日は夜勤をしていたDMATから引き継ぎを受け、自分達が活動する場所（建物）の安全を一緒に確認しました。（写真③－1・2）





【写真③－1・2　活動場所の安全確認】

当院の上田医師はAMAT（全日本病院医療支援班）が到着するまで救急外来での診療を中心に活動し、看護師2名はカウンターパートとなる宇城総合病院の医師とともに、病院内の各部門を1つ1つまわり、被災後の現状を聞き取り調査し、その結果をふまえ現状分析・課題の再評価を行いました。

宇城総合病院は救急告示病院、災害拠点病院であり、急性期病棟、回復期リハビリテーション病棟、地域包括ケア病棟を有した病床数204床の病院です。

今回の令和8年度熊本地震では宇城市と八城群氷川町で最大震度7が観測されており、町全体の被害も大きく、救急患者の受け入れを継続されており、入院患者数の増加とともに職員の疲労も蓄積している状況でした。

聞き取り調査で見えたことは、自宅が被災し病院内で開放されたリハビリ室で寝泊りし出勤している人、車中泊や自宅に戻って余震の不安でテントで生活している職員もおられたことです。入浴もできず、仕事で着用しているウエアの洗濯なども困難で、医療従事者自身の生活もままならない状況下での仕事は、使命感だけでは限界があります。

宇木総合病院は、10年前の熊本地震で職員（主に看護師）の離職が相次いだ経験があり、カウンターパートとなった医師も看護師の離職を危惧されていました。宇木総合病院は早くから災害支援ナースが派遣されていましたが、職員の被災もあり日によって必要な支援ナースの人数も異なり、私達が活動する期間は支援チームの看護師も食事介助やおむつ交換、清拭などができるように情報共有しながら調整を行いました。

救急外来は、AMATが中心となり診療支援を継続しましたが、宇城総合病院が通常機能の状態で受け入れる傷病者数を超えていたため、病院のスタッフに負荷がかかることが発生しました。

外部から被災地にはいる私達はあくまで、支援者であり被災した病院のもともとの機能や地域の役割を理解した上で、被災後の病院の方針や院長の意向を汲み取り、支援に繋げる必要があります。

そのためには、院内災害対策本部内でのミーティングへの参加や病院職員との情報交換や連携は必須であり、支援者と支援先（被災病院）との間で乖離があってはならないと改めて考える機会となりました。

被災地ではまだ余震が続いており、安心して生活できるまでには時間が必要です。被災地からは遠く離れた場所ですが、自分でできる支援を考えながら続けていきたいと思っています。





【写真④－1・2　病院支援指揮所内】



【写真⑤　院内災害対策本部ミーティング】

令和8年熊本地震対応について（医療班）

薬剤部　製剤主任　　西田　朋洋



■ 現地での活動

今回、災害発生から約１か月が経過した熊本県八代市周辺において、NHO 災害医療班として活動しました。１日目は八代市役所災害対策本部で日本赤十字社災害医療コーディネーターからブリーフィングを受け、避難所の状況や今後の避難所集約化について情報共有を行いました。その後、第八中学校、文政小学校、東陽コミュニティセンターを訪問し、避難者の健康状態や生活上の問題について確認しました。

２～３日目は八代市立第五中学校を中心に活動し、新規転入者の受け入れ準備、段ボールベッドの設置、避難所生活に必要な掲示物の作成、避難者情報の更新などを行いました。また、更新した避難者情報を後続の保健師や八代市災害対策本部へ共有し、支援の引き継ぎを行いました。

■ 現地で感じたこと

発災から約１か月が経過し、避難所では空調・シャワー・通信機器などの生活環境が整備され、地域のかかりつけ医による診療も再開されていました。そのため、今回の活動では緊急的な医療介入を必要とするケースはほとんどありませんでした。一方で、避難所の集約化に伴う生活環境の変化や、避難者の心理的な負担など、災害の慢性期ならではの課題がみられました。

■「支援する側」と「支援される側」の双方への配慮

今回、複数の支援団体が少人数の避難者に対して、それぞれ聞き取りを行っている場面がありました。必要な情報収集である一方、同じ内容を何度も尋ねられることで、避難者や施設管理者の負担となり、トラブルにつながるケースもありました。そこで、避難者の入退所状況や健康状態などを整理し、後続の支援者へ情報共有しました。「一人ひとりを診る」だけでなく、「情報をつないで、支援をつなぐ」災害発生から時間が経過した慢性期では、この視点が特に重要であると感じました。

■ 今回の活動から学んだこと

災害医療班の役割は、時間の経過とともに変化します。今回の活動を通じて、医療的な支援だけでなく、避難者の生活や心情に配慮しながら、行政・医療・保健・支援団体をつなぐことも災害医療の重要な役割であると実感しました。 NHO 災害医療班として今回の経験を今後の災害対応に生かし、当院においても平時からの情報共有や多職種連携を大切にしながら、災害時に必要とされる支援につなげていきたいと思います。



R8 年熊本地震呉医療センター医療班メンバー



他団体とのブリーフィング風景

４階病棟編成

４Ａ病棟　看護師長　森　　智美
４Ｂ病棟　看護師長　脇　友利恵





４階エリアの病棟が新しくなりました。

今まで４階Ａ病棟は主に産科、４階Ｂ病棟は主科に小児科でしたが、令和８年９月１日からは４Ａ病棟は小児科、内分泌・糖尿病内科、リウマチ・膠原病科の入院患者さんを受け入れるようになります。小児科は引き続き受け入れ、外科や耳鼻科・整形外科・形成外科などの手術目的の患者さんの入院を受け入れています。最近では眼科の手術の方や気管支鏡の検査入院、耳鼻咽喉科での点滴治療の方の入院も受け入れています。小児から成人まで幅広い年齢層の患者さんの看護に携わることができる病棟です。

この病棟編成に伴い、プレイルームも一緒に引っ越しをしました。４Ａ病棟には保育士が１名常勤しており、手術前のプレパレーション（手術をうける患児に紙芝居や人形を用いて手術の流れを説明すること）を実施、病室から出ることができない患児に本の読み聞かせや、アイロンビーズなどを行い発達に応じた遊び・保育を提供しています。そして、こどもたちやご家族に少しでも季節を感じてもらおうと、夏祭り・ハロウィン・クリスマスなどの行事を、プレイルームや廊下に飾りつけをし、医師・看護師・保育士と協力してスタッフ全員で趣向を凝らし開催しています。

４階Ｂ病棟は産科、婦人科、乳腺外科、形成外科の入院患者さんを受け入れ、未熟児新生児治療室を有しています。産科が４Ｂ病棟に移動したことで、妊娠中から分娩に携わった助産師が継続して産後のケアが行えるようになりました。

呉市唯一の地域周産期母子医療センターとして、地域のクリニックや病院から、早産児や低出生体重児、疾患を抱える新生児の入院の受け入れを行っています。ご家族と離れた入院生活をサポートするため、面会時間を通しての育児指導を行うなかで愛着形成に努め、赤ちゃん・お母さんをはじめとしたご家族に寄り添うケアを行っています。

設備としては新しく有料個室を５床増床しました。産後にゆったりと入院生活を過ごせるよう、落ち着いた色合いの壁紙とし、壁掛けのテレビや、シャワー室を併設している部屋を完備しました。

また、令和８年７月より呉地域で初めての無痛分娩を開始しました。無痛分娩を経験された方からは、産後が楽ですごくよかったとの声が多く聞かれています。今後も無痛分娩の受け入れや、育児不安の軽減をするための産後ケアにも力を入れ安心して産前・産後の入院生活が送れるよう支援していきます。

４Ａ病棟・４Ｂ病棟が病棟編成したことで、こどもからおとなまで様々な患者さんやご家族の気持ちに寄り添い、安心して入院生活が送れるよう環境づくりに努め、スタッフ一同今まで以上により専門的な知識の向上に努め、チーム医療の向上に努めてまいります。





「第7回地域医療連携のつどい」を終えて

地域医療連携部長　　吉田　成人



７月２日(木)、クレイトンベイホテルにおいて「第７回地域医療連携のつどい」を開催いたしました。当日は 87 医療機関から 159 名、院内から 107 名、計 266 名の皆様にご参加いただき、顔の見える連携の場として盛会のうちに終えることができました。これもひとえに、日頃より当院との連携にご協力いただいております皆様のお力添えの賜物であり、心より感謝申し上げます。一方で、当日は駐車場の利用ができなかったため、ご来場いただけなかった先生方やスタッフの皆様がおられたと伺っております。ご不便をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。来年度は駐車場の確保や運営方法の見直しを行い、より円滑にご利用いただけるよう改善を図ってまいります。

本年度は、昨年度末をもって副院長、事務部長が定年退職し、また看護部長、薬剤部長が異動となるなど、幹部職員が一度に交代する極めて稀な年度となりました。４月より新たな体制のもと、職員一同が高い志を持って、より充実した医療提供体制の構築に取り組んでおります。

当日は、繁田正信院長の挨拶に続き、ご多忙の中ご来賓としてお越しいただいた呉市医師会会長、石井外科診療所院長の石井哲朗先生よりご挨拶をいただきました。

また、乾杯に先立ち、当院の診療機能をご紹介するため、脳神経外科、循環器内科、産科・婦人科の３診療科によるプレゼンテーションを行いました。武田正明脳神経外科科長、土肥由裕循環器内科医長、熊谷正俊産科・婦人科科長より、それぞれの診療科の特色や最新の治療、今年度からの新たな取り組みについてご紹介いたしました。

その後、杉野浩副院長の発声で乾杯し、和やかな雰囲気の中、参加者同士の交流が行われました。併せて、事前に実施したアンケート結果についてもご報告いたしました。予約制度の満足度については、「満足」「やや満足」を合わせて 82.9%と高い評価をいただきました。その一方で、「予約の返信に時間がかかる」「予約が取りにくい」といったご意見も寄せられました。これらの課題に対し、予約が集中する診療科については７月から地域連携枠を拡充するなどの対応を行っております。

また、アンケートで多くのご要望をいただいた「予約返信時間の短縮」への取り組みとして、従来の FAX 予約への迅速な対応に努めるとともに、地域の先生方の利便性向上と患者さんの待ち時間短縮を目的として、８月より地域連携枠限定の「WEB 予約システム」を導入いたしました。

最後に、立川隆治副院長より閉会の挨拶を申し上げ、盛況のうちに会を終了いたしました。今回のつどいを通して、地域の医療機関や施設の皆様と直接お会いし、互いの考えや思いを共有できたことは大変有意義な機会となりました。今後も繁田院長をはじめ全職員が、地域の皆様との信頼関係を大切にしながら、心の通った医療連携の推進に努めてまいります。引き続きご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



会場風景



懇談風景



診療科の紹介(産科・婦人科)



診療科の紹介(循環器内科)



診療科の紹介(脳神経外科)



来賓挨拶 呉市医師会 会長
石井外科診療所院長　石井哲朗先生

令和８年度職員研修（コーチング研修）



管理課　庶務係長　　永島　一真

この度、９月 12 日に株式会社ユアーズブレーンの山根弘和先生を講師にお迎えし、コーチング研修を開催いたしました。

研修では、まず管理職・リーダーに求められる役割やスキルについて講義が行われました。参加者は自身の強みや課題を振り返りながら、コミュニケーション力やリーダーシップなどのノンテクニカルスキルの重要性について理解を深めました。

続いて、本研修の中心テーマであるコーチングについて、講義や演習を通じて学びました。演習では、多職種５～６名で構成された５つのグループに分かれ、グループワークやロールプレイングを実施しました。医師、看護師、コメディカル、教育関係者など、多様な職種の参加者が交流しながら意見交換を行い、活発な議論が展開されました。

研修終盤のロールプレイングでは、承認、傾聴、質問、フィードバックといったコーチングスキルを取り入れたシナリオを各チームで作成し、実演を行いました。各チームの創意工夫あふれる発表は、学びを深めるとともに会場全体を和やかな雰囲気に包み、参加者同士の交流促進にもつながりました。

今回の研修を通じて、コーチングは相手の主体的な行動を促すための重要なコミュニケーションスキルであり、その実践には相手を尊重し、可能性を信じる姿勢が欠かせないことを学ぶ機会となりました。また、多職種間の交流を通じて相互理解を深める有意義な場ともなりました。

最後に、ご多忙の中ご講義いただきました株式会社ユアーズブレーンの山根弘和先生をはじめ、本研修の企画・運営にご尽力いただいた関係者の皆様、そしてご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。









解剖慰霊祭について



管理課　庶務班長　　地田　浩二

令和８年９月 10 日（木）14 時より、当院の地域研修センターにおきまして、令和８年度の「解剖慰霊祭」が厳粛かつしめやかに執り行われました。

当院における解剖慰霊祭は、医療の発展ならびに病因の究明・診断精度の向上のため、当院にてお亡くなりになり解剖をさせていただいた患者様方の御霊（みたま）をお祀りする大切な儀式です。２年に一度、秋風が吹き始める９月頃に開催しており、生前の尊いご協力に対する心からの感謝と御礼を申し上げるとともに、ご遺族の皆様の今後のご平安をお祈りすることを目的としています。

今年度の慰霊祭には、ご遺族をはじめ、当院の病院職員、そして未来の医療を担う看護学生たちが列席いたしました。式典は開式とともに全員による深い黙祷から始まり、静寂の中で亡くなられた患者様お一人おひとりのご尊名が恭しく読み上げられました。続いて、繁田院長より感謝と追悼の意を込めた慰霊の辞が述べられました。その後、列席者全員が白菊の花を祭壇へと手向ける献花を行い、御霊を安らかにお慰めするとともに、ご冥福を深くお祈りいたしました。

解剖により得られた貴重な知見は、日々の診療や医療技術の向上、そして次世代の医療従事者の教育において非常に大きな役割を果たしております。当院職員ならびに看護学生一同、いただいた尊いご献体の志を胸に刻み、今後も地域医療の発展と医療の質の向上に邁進してまいる所存です。ここに謹んで御霊のご冥福をお祈り申し上げますとともに、ご遺族の皆様のご健勝とご平安を心よりお祈り申し上げます。







「やっぱり看護師になりたい!!」～ふれあい看護体験記～

9A 病棟　看護師長　　後藤美穂子



令和８年７月24日、看護師を目指す高校生を対象に「ふれあい看護体験」を開催しました。総勢44名の、夢に満ち溢れた高校生のエネルギーに包まれ、大盛況となりました。

『病棟見学ツアー』では、看護師が実際に働く姿を間近で見学しました。

手術室では、実際の手術環境をライブ映像で見学し、普段は見ることのできない手術室の様子や、医師、看護師とコメディカルがチームとなり一つの命に向き合う姿に、参加者は真剣な表情で見入っていました。

救命救急センターでは、一刻を争う緊迫した状況で、さらに多くの医療機器に囲まれた環境の中で、テキパキと動く看護師の姿を見て、「ドラマと一緒だ」と目を輝かせていました。

産科病棟では、生命の誕生に携る助産師や、小さな命を守る看護師の優しさと温かさだけでなく、点滴や人工呼吸器の管理をする緻密で専門性の高い実践力を感じることができました。そして、小さな赤ちゃんが一生懸命に生きようとしている姿に涙ぐむ高校生もおり、生命の尊さを感じる機会となりました。

『救急蘇生体験コース』では、ストレッチャー搬送や心臓マッサージを体験しました。実際に体験することで、命を救う職業のすばらしさや誰かの力になれる仕事の魅力を感じてもらいました。担当看護師がストレッチャーに乗り、心臓マッサージをしながら患者を搬送する姿を見て、参加者からは「すごい！かっこいい！」と自然に拍手が沸き起こりました。

患者さんに寄り添う優しさ、確かな知識と技術、そして命をつなぐ強さを感じ、さまざまな現場で活躍する看護師の姿に触れることで、「自分もこんな看護師になりたい」という憧れが、より大きく膨らむ一日となりました。













令和8年度 第2回オープンスクールを開催しました

呉医療センター附属呉看護学校　教員　　三宅　優子



８月29日(土)に第２回オープンスクール(午前の部・午後の部)を開催しました。天気も良く、残暑厳しい中でしたが、約50名の受験希望者と保護者の皆さまにご参加いただきました。朝９時の受付から始まり、視聴覚教室でのオリエンテーション・教員紹介に続いて、学校説明、看護部長様による病院説明、学生による学校紹介、教員による公開講座を行いました。参加者の皆さまは熱心に耳を傾けられ、本校での学びの特徴や学生生活への理解を深めておられました。

病院説明や公開講座の後は、３つのブースに分かれて看護技術体験を実施しました。【赤ちゃん抱っこ・おむつ交換】【衛生学的手洗い】【バイタルサイン測定】を体験していただきました。【赤ちゃん抱っこ・おむつ交換】は３年生、【衛生学的手洗い】【バイタルサイン測定】は１年生が中心となって企画し、各々がこの日に向けて練習や打ち合わせを重ねてきました。７月開催の第１回オープンスクールに来てくださった参加者もおられ、「前回と違う技術を体験できて楽しかった」「学生さんが丁寧に教えてくれた」などの声が聞かれました。保護者の方にも技術体験の場面を見学していただきました。１年生は習ったばかりの看護技術を初めて参加者にご覧いただきました。入学して半年ですが目覚ましい成長を実感しました。参加者にとっては入学して半年後のイメージに繋がったのではないかと思います。

後半は、教室で受験希望者と在校生との座談会を行いました。保護者の皆さま向けにも別室で座談会を実施しました。保護者の方々は教員や母体病院の看護部長・副看護部長と直接話すことで、学校生活や実習、卒業後の進路など在学中だけでなく就職後について理解を深められました。

一人でも多くの方に本校を知っていただき、進路選択の一助になれば幸いです。

令和８年度　第３回 オープンスクールのご案内

【開催日時】　令和９年３月13日(土)午前の部９:00～
【応募期間】　令和９年１月18日(月)　～
【応募方法】　参加申込方法の詳細は、HPにてご確認ください。
【内　　容】　学校説明、学校紹介、公開講座、看護技術体験
　　個別進路相談(希望者)、寮見学(希望者)
【お問合せ】　独立行政法人国立病院機構　呉医療センター附属呉看護学校
　　TEL:0823-22-5599（土日祝日を除く９:00～17:00）
　　Email：toko.junko.hj@mail.hosp.go.jp

ココから⬇

看護師を目指す方、ぜひ、お越しください。
私たち学生と看護技術を一緒に体験し、交流を深めましょう!!



【赤ちゃん抱っこ･おむつ交換】



【バイタルサイン測定】



【衛生学的手洗い】

第15回 臨床研究セミナーを開催して

治験管理室　治験主任　　矢野　圭悟



治験管理室では 2013 年より、治験・臨床研究の啓蒙活動の一環として臨床研究セミナーを開催しています。今年も独立行政法人 医薬品医療機器総合機構（PMDA）の藤原 康弘理事長をお招きし、「日本を魅力ある臨床開発環境とするために～ PMDA の取組みを中心に～」をテーマにご講演いただきました。藤原理事長には 2016 年より、コロナ禍での 2 回の中止を除き、毎年継続してご登壇いただいております。

講演では、本邦における創薬力向上に向けた行政の対応、革新的製品の開発強化に向けた PMDA の取組み、さらに日本を魅力ある臨床開発環境とするための方策について、幅広くお話しいただきました。近年、海外で開発された新薬が日本では開発されない「ドラッグ・ロス」が課題となる中、革新的な医薬品を一日でも早く患者さんへ届けるためには、日本が国際共同治験などの実施国として選ばれる環境を整えていくことが重要です。そのためには、行政や規制当局の取組みだけでなく、医療機関においても治験開始までの手続きの迅速化、症例集積力の向上、被験者負担に配慮した実施体制の整備など、治験を迅速かつ質高く実施できる環境づくりが求められます。さらに、国際共同治験への継続的な参画には、治験依頼者から信頼される実施体制を構築し、安定して質の高いデータを提供していくことも重要です。こうした一つ一つの取組みが、日本全体の臨床開発力の向上につながることを改めて認識しました。

また、今後予定されている GCP 改正では、被験者保護とデータの信頼性確保を基本としつつ、リスクに応じた柔軟な治験運営や、治験の質を計画段階から確保する考え方がより重視されます。治験実施医療機関にも、従来の手順を守るだけでなく、重要なリスクを意識しながら効率的かつ質の高い治験を実施する姿勢がこれまで以上に求められます。

今回の講演を通じ、治験を取り巻く環境が大きく変化する中で、当院も「選ばれる治験実施施設」となるための体制をさらに整えていく必要性を改めて感じました。治験管理室では今後も、院内各部署と連携しながら治験・臨床研究の質の向上に取り組み、新しい治療を患者さんへ届ける一助となれるよう努めてまいります。





認定看護師紹介

皮膚・排泄ケア認定特定看護師　　大田　百恵



皮膚・排泄ケア認定特定看護師は、褥瘡（床ずれ）などの創傷ケア、ストーマ（人工肛門・人工膀胱）のケア、排泄ケアを専門とする看護師です。

私は、主に院内の褥瘡予防・管理に取り組んでいます。褥瘡は、寝たきりなどによって長時間身体の同じ部位に圧力がかかることで発生し、一度できてしまうと痛みを伴うだけでなく、治癒に時間がかかる場合が多くあります。そのため、予防することがとても重要です。患者さんの全身状態や栄養状態、活動の状況、皮膚の状態などを総合的に評価し、適切な処置や体圧分散の方法、栄養管理など、皮膚科医師をはじめ多職種と連携しながら、一人ひとりに合わせた予防方法やケアを検討しています。また、手術創、外傷、オムツかぶれなどの様々な皮膚障害に対するケアにも対応しています。創の状態だけを見るのではなく、「なぜこの創ができたのか」「どうすれば早くなおすことができるか」を考え、患者さんの生活背景や全身状態も含めてケアを行うよう、心がけています。

ストーマケアでは、ストーマを造設された患者さんやご家族へのストーマ装具交換方法、皮膚トラブルへの対処、日常生活上の注意点などについて指導・支援しています。また、ストーマ外来では、退院後のストーマ患者さんの生活を継続的にサポートしています。特に、ストーマ周囲の皮膚がかぶれた、ストーマ装具からの漏れがあるなどの相談の場合は、皮膚の状態やお腹の形をアセスメントし、外用薬の検討やストーマ装具の変更を検討しています。ストーマを造設すると、「今まで通りの生活ができるのだろうか」「外出や旅行はできるのだろうか」など、さまざまな不安を抱える方もおられます。患者さん自身がストーマと上手に付き合い、自信を持って生活できるよう、患者さんの生活スタイルに合わせた解決方法をスタッフとともに支援をしています。

そして、患者さんへのケアだけではなく、院内スタッフへの教育も大切な活動の一つです。褥瘡などの創傷のケア、ストーマケアなどについて、院内研修や部署ごとの学習会を行っています。

私の所属する褥瘡防止対策委員会では、院内の褥瘡対策を推進するため、委員会の中でレクチャーを行ったり、スタッフとともに現状を振り返り、ケア方法の検討や情報共有、院内の取り組みの検討などを行っています。褥瘡は「できてから治す」のではなく、「できないようにする」という視点を大切にし、日々の看護に褥瘡予防の意識が根付くことを目指しています。

私は、患者さんのあらゆる創傷を早く治すために、より専門的な知識と技術を身に付けたいと考え、2020 年に創傷管理の特定行為研修を受講しました。現在は医師の指示のもと、手順書に沿って褥瘡などの壊死組織の除去も実施しています。創傷の状態を見極めながら、必要な処置を適切なタイミングで行い、早期治癒につなげられるよう地域の医療機関とも連携し活動しています。

これらの活動の中で、褥瘡をはじめとした皮膚障害が改善したり治癒したことを、患者さんやスタッフと共にその喜びを分かち合えたときは、とても達成感があります。また、スタッフの学びが患者さんのケアに活用することができている場面を確認できた時は、もっと専門的な知識や技術を自分自身が学び、広げていきたいという気持ちになります。

これからも、患者さんやご家族にとって身近な相談相手となり、またスタッフとともにより良いケアを考えながら、院内の看護の質の向上に努めていきます。



患者さんのケアの場面



皮膚・排泄ケア認定看護師の活動

うちの部署の接遇キラリさん



看護部
外来 内視鏡センター
看護師
藤林　花穂さん

内視鏡センターは胃カメラや大腸検査、胆管膵管造影検査、気管支鏡検査、胃ろう造設・交換、カプセル内視鏡など様々な検査や治療をスタッフで協力しながら行っています。検査や治療に対して、苦痛の程度も違い、不安を抱く方も多いため、安心できる声かけや対応を心がけています。治療、検査も日々変化しており、その時に求められる知識が変わってきます。そのため、内視鏡検査技師の資格取得に挑戦し、多くの知識、経験の向上に努め、安心、安全に行えるように頑張っていきたいです。

鎌元　看護師長より

日々の多様な内視鏡業務において、患者さんの苦痛や不安に寄り添う姿勢を大切にし、丁寧でわかりやすい検査説明を行うことで、安心感を与えることができています。患者さんだけではなく、同僚にも笑顔で接し、部署全体に良い雰囲気をもたらしてくれています。また、目標としていた「消化器内視鏡技師」の資格を取得し、その専門的な知識と技術を日々の介助にしっかりと活かしている向上心と実践力は大変素晴らしいです。今後もその強みと専門性を存分に発揮し、安全・安心な内視鏡センターを支える存在として活躍されることを期待しています。



地域医療連携室
看護師
三國　千史さん

地域連携室は、地域の医療機関と病院をつなぐ窓口として、患者様が安心して必要な医療を受けられるよう支援する部署です。私は地域連携業務を担当しており、地域の医療機関との窓口として電話対応を行っています。相手の顔が見えない中でも安心して相談していただけるよう、丁寧で分かりやすい対応を心掛けています。これからも患者様やご家族、地域の医療機関の皆様に安心して相談していただけるよう、丁寧な対応を心掛けながら、相手の立場に立った温かい関わりを大切にしていきたいと思います。

西岡　看護師長より

三國さんは今年３月に外来から異動し、地域医療連携室の一員として日々活躍してくれています。明るい笑顔と穏やかな人柄で、多職種との連携を円滑に進め、部署にとって欠かせない存在となっています。患者さんやご家族の思いに寄り添った丁寧な支援も三國さんの大きな強みです。これからも地域と病院をつなぐ架け橋として、さらなる成長と活躍を期待しています。



医局（研修医）
研修医１年目
神垣　一世さん

研修医として診療に携わる中で、患者さんにとって病院は、不安や緊張を抱えて訪れる場所でもあると感じています。そのため、診療内容だけでなく、声のかけ方や表情、説明の仕方も大切にしたいと考えています。自分にとっては日常的な検査や処置でも、患者さんにとっては初めての経験かもしれません。少しでも安心して診療を受けていただけるよう、分かりやすく丁寧な対応を今後も心がけていきたいと思います。

大下　臨床研修センター部長より

神垣先生は、この4月から研修医として、また社会人としての歩みをはじめました。研修医は救急外来では患者さんに最初に接触する医師であり、病棟でも主治医団の中でもっとも患者さんの身近な存在であり、自身の研鑽とともに病院の印象を決める重要なキーマンであるという自覚をもって日々接遇に努める必要があります。神垣先生ははきはきとした応答が大変印象的ですが、あわせて丁寧かつ真摯な応答もされており、周囲にも大変よい影響を与えてくれます。研修医はーか月ごとに各科・各病棟をローテーションするので、都度都度に現場になじんでいくのが大変とは思いますが、これからもその明るい笑顔で、病院を元気に引っ張っていってください。



リハビリ
理学療法士
寺西　克浩さん

リハビリテーション科では、入院早期から患者さん一人ひとりの状態や生活背景に合わせて、身体機能の回復だけでなく、退院後の生活を見据えた支援を行っています。リハビリでは、患者さんの身体に触れたり、できないことに一緒に向き合ったりする場面が多くあります。だからこそ、安心してリハビリを受けていただけるよう、挨拶や言葉遣いはもちろん、患者さんの気持ちに寄り添った声かけを心がけています。また、患者さんとの何気ない会話の中には、その方の生活や思いを知るための大切なヒントがあると考えています。「この人になら話してもいい」と思ってもらえるような関係づくりを大切にしながら、一人ひとりに丁寧に向き合っていきたいと思います。

廣川　理学療法士長より

寺西さんは、業務が多忙な折にあっても決して動じることなく、常に冷静かつ適切な対応ができる理学療法士です。患者様への応対も極めて丁寧であり、ご本人のご要望に寄り添いながらリハビリを実践される姿は、多くの患者様から厚い信頼を寄せられています。さらに、その穏やかな語り口は後輩育成の場でも活かされており、新入職員が萎縮することなく質問できる環境の醸成に繋がっています。いかなる時も笑顔と平常心を保ち、真摯に業務に邁進される姿勢は誠に頼もしく、今後のさらなる飛躍が期待される存在です。

連携医療機関 紹介

石泌尿器科医院

医療法人社団　石泌尿器科医院　　院長　石　光広

呉医療センターの先生方ならびに医療従事者の皆さまには、日頃より地域医療を支えていただき、深く敬意を表します。このたび、当院の診療をご紹介いたします。石泌尿器科医院は、呉市本町のすこやかセンターくれ向かいに位置し、地域の泌尿器科診療を担う診療所として、日々の診療に取り組んでいます。

当院では、前立腺肥大症、過活動膀胱、腹圧性尿失禁などの下部尿路機能障害をはじめ、尿路悪性腫瘍、尿路感染症、性行為感染症、尿路結石症、男性更年期障害、ED（勃起障害）、性別違和など、泌尿器科全般の外来診療を行っています。また健診で指摘された尿潜血・尿蛋白の精査、前立腺がん検診（ＰＳＡ検査）にも対応しています。排尿症状を主訴とする患者さんは多く、症状の程度だけでなく、睡眠や外出など日常生活への影響にも目を向けた診療を大切にしたいと考えています。

小児泌尿器科領域では、夜尿症、学校検尿異常、包茎・亀頭包皮炎、停留精巣や陰嚢水腫などの治療・相談に対応しています。また、泌尿器科ならではのデリケートな相談も受けています。患者さんが訴えにくい症状を扱う診療科として、相談しやすい関係づくりを心がけてまいります。

泌尿器科悪性腫瘍に関しては、主に腎がん、腎盂尿管がん、膀胱がん、前立腺がんの診断・治療後のフォローおよび前立腺がんに対する内分泌療法、監視療法を行っています。がん診療では、病院での専門的治療と地域での継続診療が円滑につながることが重要と考えています。治療方針や経過を共有し、病状の変化に応じて適切な医療へつなぐことで、患者さんが安心して療養できる体制に貢献したいと考えています。

また、尿道カテーテルの交換や自己導尿などの排尿管理にも対応しています。排尿管理を必要とする患者さんでは、原因疾患だけでなく、身体機能や生活環境、ご家族・介護者の支援状況にも配慮する視点が欠かせません。かかりつけ医や看護・介護に携わる皆さまと情報を共有し、療養生活に即した支援を行うことを大切にしていきたいと考えています。

地域で切れ目のない医療を提供するためには、病院と診療所がそれぞれの役割を果たし、相談し合える関係を築くことが重要です。排尿障害や血尿、継続的な排尿管理など、泌尿器科的な評価・対応を要する際には、お気軽にご相談いただければ幸いです。今後も呉医療センターをはじめ地域の医療機関、多職種の皆さまとの連携を大切にし、地域医療に貢献してまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。



石泌尿器科医院　院長　石　光広
〒737-0032　広島県呉市本町９－19

我が家のスターたち

村高 陽笑くん



保護者コメント

入園して約１年半、先生やお友達のおかげで、毎日楽しく園生活を送っています。
初めは、まだ歩けないところからのスタートでしたが、今では元気に走り回り、お着替えやトイレもできるようになり、日々の成長に嬉しく思っています。
園での出来事も「誰と何をした」と具体的に教えてくれるようになり、お話しすることも本当に上手になりました。
お休みの日でも大好きな先生やお友達の名前をよく口にするほど、園での生活を楽しんでいるのが伝わってきます。
先生方にたくさんのサポートをしていただき、いつも本当に助けられています。ありがとうございます。
卒園まで残り少なくなってきましたが、最後まで天真爛漫な陽笑らしく、楽しく園生活を過ごしてもらえたらと思います。

担任保育士のコメント

いつも元気いっぱいで、お話することが大好きなひわくん。
「ミッキーの時計誰が作ったん」「これ何？」と身のまわりのことに興味を持ち、たくさん質問してくれます。
先生たちの会話を聞いて、「あー、そうなん！」と返してくれる姿も、とっても可愛いです。
お友だちと遊んだり、先生とお話ししたりする中で、心も身体も大きく成長しましたね。
これからも、その素敵な笑顔と好奇心を大切に、元気いっぱい大きくなってね！

松前 永祈くん



保護者コメント

入園した頃は、まだずり這いをしていたとっくんも、今では元気いっぱい走り回って、おしゃべりもとっても上手になりました。
大好きな歌もよく歌っていて、家でも楽しそうな歌声を聞かせてくれます。
元気いっぱいでお調子者なところもあれば、ちょっぴり恥ずかしがり屋さんなところもあります。
そんなとっくんが、保育園で少しずつできることを増やしていく姿を見られることができて、パパとママは嬉しいです。
入園した頃から温かく、親身になってくださる先生方のおかげだと思います。
ありがとうございます。
これからも、大好きなお友だちや先生とたくさん笑って元気に過ごしてほしいです。

担任保育士のコメント

弾ける笑顔がかわいいときくん♡
「ときがやりたい！」とどんなことにも全力で、いつもやる気満々です‼
苦手な野菜を食べたり、お着替えを１人でしたり、トイレトレーニングを頑張ったり、たくさんの頑張る姿がかっこいいです☆
遊ぶ時も全力で、公園に行くと「あれしたい！」と遊具で遊んだり、虫探しをしたり、働く車を観察したり…お友達や先生と遊ぶことやたくさんの発見を楽しんでいます。
これからも「やってみたい！」「できたよ！」をたくさん見せてね！
楽しいも頑張るもいっぱいして、思い出たくさん作りましょう♪

呉医療センターへご寄付をいただきました。

令和８年７～９月に、ご寄付をいただきました。
◆ご寄付　株式会社昴珈琲店（医療従事者の方々への感謝）、
匿名1名（院内保育園（すずらん園）アンパンマン遊具更新のため）

みなさまからの気持ちのこもったご支援をありがとうございました。

編集後記

寒冷の候、皆様におかれましては風邪など召されずお過ごしでしょうか。
今号では熊本地震の災害派遣活動についてお伝えいたしました。
災害時の医療を守るためには、行政や医療機関の取り組みに加え、私たち一人ひとりの防災意識と適切な行動が欠かせません。本誌が身近な医療防災を見直す一助となれば幸いです。寒さ厳しくなる折、お体を大切にお過ごしください。
（広報委員会）

〒737-0023 広島県呉市青山町3-1　　発行責任者　呉医療センター・中国がんセンター院長　繁田　正信
https://kure.hosp.go.jp/